國學院大學学術情報リポジトリ

弥生時代の卜骨の再検討：シカ・イノシシからみた時代性・地域性について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浪形, 早季子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001964

弥生時代の卜骨の再検討
—シカ・イノシシからみた時代性・地域性について—

浪形　早季子

要旨

卜骨・卜甲は現代の神社神事にもみられるように祭祀関連遺物として非常に注目される遺物である。1940年代以降遺跡から出土し、1990年まで神澤勇一氏が全国的な集成を行っている。しかし、その後も資料点数は増加しているため、本論では現在までに報告されている遺跡出土資料を集成し、卜骨のもつ属性の中から動物の種類と部位に注目し、地域性と時期性を提示した。卜骨は占いの道具であるため、その素材に用いる動物の選定は重要な意味を持つと考えられるからである。従来は卜骨に使用されるのはシカの肩甲骨が大半であるとみられてきたが、今回集成した結果、とくに弥生時代では東海地方を境にその西と東でイノシシとシカの比率に大きな違いが見られることがわかった。シカとイノシシを利用することは弥生時代では東日本、西日本に共通しているが、その利用形態に大きな違いが見られることが明らかとなった。

キーワード

卜骨、弥生時代、動物種、地域性、時期性

はじめに

卜骨・卜甲は縄文時代には見られず、弥生時代以降に出現する占具である。本論では、卜骨・卜甲について現在までに遺跡から出土している資料を集成し、その素材に使用された動物種と部位についての傾向を提示した。これはシャーマンの行う宗教的儀礼に用いられる巫具の一つが卜骨・卜甲であると考えるからである。エリアーデは、卜占そのものはシャーマニズムの基礎をなす精霊の実在性を現実のものにしたり、それとの接触を促進するのに適した技術であるとしている（M. エリアーデ, 1974）。卜骨・卜甲はシャーマンが地域社会の住民の見ている前で儀礼を行う際に、その特殊な神秘的現象の示威ための必須道具であり、威信材的役割も持ち合わせていたと考えられる。つまり、卜骨・卜甲は非常に重要な道具であって、その素材そのものにも非常に重要な意味があったと考えられる。

これまで卜占の研究は江戸時代から行われ、考古学の分野からも卜占技法・内容・素材など様々な形でアプローチが進められてきたが、素材に用いられた動物種についての詳細な研究はみられないため、本論では素材に用いられた動物種及び部位に焦点を当てて議論する。特に弥生時代の卜骨に用いられたシカとイノシシについてその比率をもとに、地域性を提示し、家畜化や起源論についても触れる。しかし家畜化と起源の問題については今後に多く課題を残すため、展望も含めて考察する。

弥生時代は縄文時代のアニミズム的社会からシャーマニズム的社会へと変遷していく社会である。シャーマニズムといわれる宗教文化を構成する中心はシャーマンと呼ばれる宗教的巫術を行使する呪術実修者の存在である。このような社会的精神の変遷は儀礼行為にあらわれる。その儀礼の一つが動物を用いた動物儀礼である。儀礼を扱うことは本来なら「モノ」を扱う考古学の立場からは見えにくい「心」を探る行為であるため、その解明は非常に難しい。しかし、今回、卜骨・卜甲をテーマに取り上げることによって、動物儀礼の一側面を明らかにし、その社会の精神論をみるきっかけとしたい。卜占以外の動物儀礼については今後の課題とする。

1. 卜占とは

卜占とは獣骨や亀甲を灼き、焼けひびの形状で吉凶を占う風習である。骨卜は獣骨を材料に使う卜占法であり、甲卜はカメの甲羅[(1)]を材料に使う。

元来、「卜」の字はひび割れが入るときの音（漢音ボク、上古音〔puk〕）の説が有力であったが、落合によれば、これは乾いた音の表現としては不適当

であるとし、藤堂明保の『学研　漢和辞典』からの「ぽくっと急に割れる意を含む」とするのを正解としている（落合，2006）。つまり卜占とは焼灼のあることをまず第一条件とするのである。考古資料から見た場合、何をもって卜骨とするかについて、新田は、灼を加えたもののみ判断できるとしている（新田，1977）。新田は北半球の広大な地域にある骨を使った占法についてまとめているが、大きく3つに分類している。a. 骨を焼かずに自然のままの状態で骨の表わす特徴にもとづいて占う方法である無灼法、b. 骨全体を焼き生じた亀裂にもとづいて占う全面有灼法、c. 骨に灸のような点状の灼を加え生じた亀裂によって占う点状有灼法である（新田，1977）。ヨーロッパを中心に、例えばヒツジや去勢された牡ウシの肩甲骨を、焼かずに自然の色と骨の形によって占うなど、焼灼を加えずに占う方法がみられるが、これは考古学的な証明は難しい。加工を加えない骨そのものを占いに使用した場合、食糧残滓との区別ができないからである。また考古資料には、未製品を含むため、日本出土の卜骨は浅い窪みである鑽[2]を掘り込んだものが古墳時代以降に多くみられるので[3]、焼灼があること、もしくは鑽のあることのどちらか二つの条件を満たせば考古学的な卜骨資料と認定する。

この卜占風習は『三国志』魏書東夷伝倭人条、『古事記』、『日本書紀』、『延喜式』、『万葉集』などの種々の記事より、古代から行われていたことがわかる。

骨を使った占法は北半球の広大な地域に存在し、現在でも行われている地域もある。日本でも今日なお僅かであるが神社神事に卜占がみられる。

2. 研究史

卜占は本居宣長の『古事記伝』や伴信友の『正卜考』より江戸時代にはすでに研究対象とされていた。

明治・大正時代になると田口卯吉、鳥居龍蔵などによって、そのルーツの問題が取り上げられ、卜骨については蒙古の例との類似性が指摘された（(編)鼎軒田口卯吉全集刊行會，1927・鳥居龍蔵，1975）。しかし鳥居は使用動物種の違いから骨卜は日本独自の発生であるとした（鳥居龍蔵，1975）。その後、三品彰英や大林太良らは蒙古・ツングース系からの伝播説を唱えた（三品，1970・大林，1977）。しかし大林は同時に中国起源説も提示した（大林，1977）。大谷光男は中国南部伝播説を唱え、特に漁撈民族との関係を指摘している（大谷，1978）。新田栄治は中国東北地方・朝鮮北部からの由来の可能性を指摘し（新田，1977）、木村幾多郎もこれに賛同している（木村，1979）。このように明治時代以後、その伝播説についての研究が数多く行われた。卜骨についてはそのルーツをめぐって世界史的に日本の卜骨を位置づける研究が主流に行われてきた。しかし、亀卜については文献も多く民俗例も多いことから、藤野岩友、熊谷治、永留久恵らによって日本での事例研究が進められてきたが（藤野，1960・熊谷，1976・永留，1982）、骨卜については神社神事や文献に留まることから、詳細な事例研究はあまり行われてこなかった。しかし、1949年にはじめて三浦半島の間口洞窟遺跡から弥生時代後期前半の卜骨が出土したことをきっかけにその類例を増やしていったことによって考古学の分野からの卜占研究が盛んになる。

考古学の分野から卜骨研究が盛んになるのは、1970年代後半からである。神澤勇一氏は赤星直忠氏と共に三浦半島の海蝕洞窟遺跡を発掘し、この地域で頻繁に卜骨・卜甲が出土したことから三浦半島を中心に卜占についてまとめている。また三浦半島以外からも新潟県の千種遺跡、島根県の古浦遺跡、大阪府の日下遺跡、静岡県石川遺跡、長野県生仁遺跡からも出土したことから、全国的な集成を行い、形式分類を行った（神澤，1976など）。この形式分類は現在も各報告書で使用されている。また、木村幾太郎氏は壱岐島出土の卜骨について集成し（木村，1979）、金関丈夫氏は島根県の古浦遺跡出土の卜骨について論考するなど（古浦遺跡研究会・鹿島町教育委員会，2005）、遺跡出土の卜骨出土が多く見られる地域を中心に研究が進められてきた。出土例の多い三浦半島、多賀城周辺、山陰などの各地域の卜骨については記載されている（中村，2002・千葉，2002・北浦，2002）。しかし、近年では、遺跡出土の資料が増加しているが、全国的な集成は神澤が1990年に「呪術の世界―骨卜のまつり」の中で行って以来、みられない。

3. 遺跡出土の資料について

(1) 卜骨・卜甲出土遺跡数と出土点数

日本の遺跡出土の卜骨・卜甲については神澤氏が1976年から集成しており、当初17遺跡65点であったものが1990年には40遺跡202点にまで増加している。そのうち弥生時代出土のものは25遺跡116点、古墳時代から平安時代出土のものは15遺跡86点である。卜骨・卜甲出土例は年々増加している。

今回集成した結果、弥生時代の卜骨出土遺跡数は34例、資料数は284点であり[4]、古代まで含めると、64遺跡975点にのぼる（図1）。15年以上でかなりの増加が見られる。このうち卜骨出土遺跡は62例、卜甲出土遺跡は6例である[5]。

今回議論に用いるのは、時代や素材に使用された動物種もしくは部位が判明している54遺跡、548点である（表1）。集成した資料は報告書からの引用だが、時期の不明なものや、破片であるために素材の同定が困難なもの、また、未報告なものや概報のみ

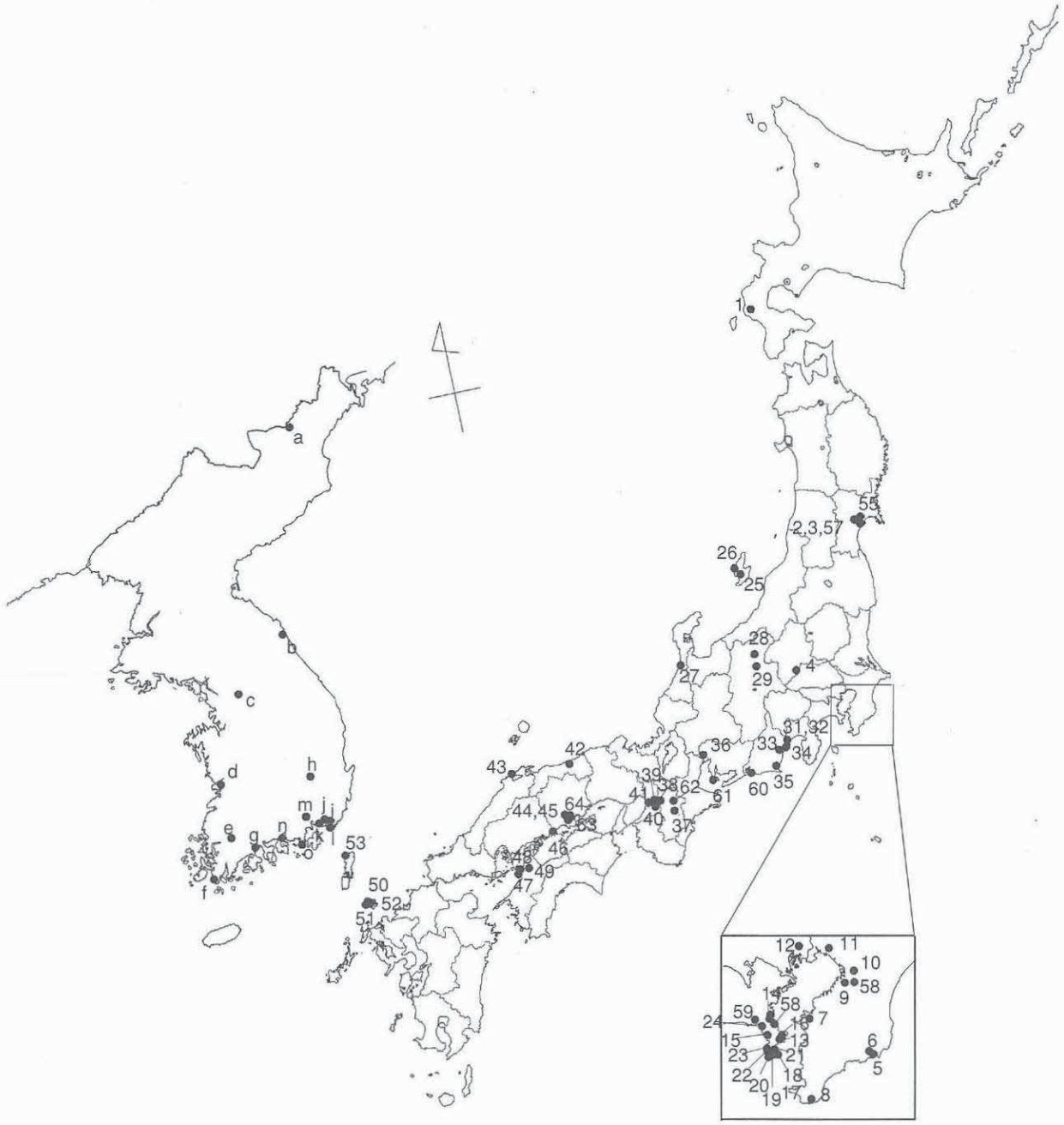


図1　日本と韓半島の卜骨・卜甲出土遺跡分布図

※遺跡№1～53は表1の一覧表に記載しているが、遺跡№54～64は出土時期もしくは出土動物種・部位が不明なものであるため表1の一覧表には提示していないが、表2に遺跡名のみ示している。
日本の遺跡番号は表1，2の遺跡番号に対応し、韓半島のアルファベットの遺跡表記も表3に対応する。

表1　遺跡出土ト骨・ト甲一覧表（1/3）

遺跡No.	出土遺跡	動物種	部位/年齢/個数	時期	所在地
1	貝取澗2洞窟	エゾジカ	肩甲骨L(♂)1点	続縄文（恵山文化） A.D.～B.C.境界年～B.C.300	北海道久遠郡大成町字貝取澗
2	多賀城跡・鴻ノ池	ウシ/ウマ	肋骨4点	9世紀後半	宮城県多賀城鴻ノ池地区
3	山王遺跡	シカ	肩甲骨L(若獣）2点 肩甲骨R1点 肩甲骨左右不明14点	古墳時代中期	宮城県多賀城市山王及び南宮及び市川
		シカ	肩甲骨L13点 肩甲骨R12点 肩甲骨左右不明61点 肋骨66点	古墳時代後期	
		ウシ/ウマ	肋骨2点		
		シカ	肋骨1点	8C後半～9C前葉	
		ウシ/ウマ	肋骨3点		
4	新保田中村前遺跡	イノシシ	肩甲骨L5点 肩甲骨R2点	弥生時代中期～後期	群馬県高崎市新保田中町
		シカ	肩甲骨L4点 肩甲骨R2点		
5	こうもり穴洞穴	シカ	肩甲骨L2点 肩甲骨R3点 肩甲骨左右不明1点 寛骨L1点 寛骨R1点 肋骨R2点	弥生時代後期～古墳時代前期	千葉県勝浦市守谷字茂浦
		イノシシ	肩甲骨L6点 肩甲骨R1点 寛骨L1点		
		（サル）	肩甲骨L1点		
		シカ	肩甲骨L1点 第2or3胸椎1点	弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭	
		イノシシ	肩甲骨R1点 寛骨L1点		
6	本寿寺洞穴	シカ	椎骨1点	弥生時代	千葉県勝浦市守谷字浦野ノ代
		イノシシ	椎骨1点		
7	郡遺跡群	ウシ	肋骨1点	弥生時代中期～平安	千葉県君津市郡字下赤磯，小山野字福造
8	沢辺遺跡	イノシシ?	肩甲骨1点	6世紀後葉～7世紀前葉	千葉県安房郡白浜町白浜字沢辺
9	菊間遺跡	シカ	肩甲骨R1点	弥生時代中期(小田原式)	千葉県市原市菊間字北野
		シカ	肩甲骨R2点	弥生時代後期前半かそれ以降(宮ノ台式かそれ以後)	
10	城ノ腰遺跡	シカ	肩甲骨1点	弥生時代中期	千葉県千葉市
11	印内台遺跡群	シカ	肩甲骨2点 肋骨2点	古墳時代後期（鬼高式期）	千葉県船橋市印内
		ウミガメ	背甲/腹甲7点	７C後半～8C初頭(奈良)	
12	向ヶ丘貝塚	シカ	寛骨L1点 四肢骨片1点	弥生時代中期	東京都文京区弥生町
13	蓼原遺跡	イルカ	肋骨2点	古墳時代後期～奈良	神奈川県横須賀市神明町
14	鉞切遺跡	ウミガメ	肋骨板2点	6C末～7C初	神奈川県横須賀市浦郷町
		イルカ	肋骨1点		
15	芦名浜遺跡	イルカ	肋骨41点	奈良～平安	神奈川県横須賀市芦名
16	小荷谷遺跡	シカ	肋骨1点	古墳時代後期～平安	神奈川県横須賀市
17	間口洞窟遺跡	シカ	肩甲骨5点	弥生時代中期	神奈川県三浦市南下浦町松輪
		シカ/イノシシ	肋骨2点		
		シカ	肩甲骨4点	弥生時代後期	
		シカ/イノシシ	肋骨7点		
		アカウミガメ	腹甲3点	古墳時代後期	
18	大浦山洞窟遺跡	シカ	肩甲骨1点	弥生時代中期	神奈川県三浦市南下浦町松輪
		イルカ	肋骨1点		
		シカ	肩甲骨1点	弥生時代後期	
		イノシシ	肩甲骨1点		
		シカ/イノシシ	肋骨3点		

表１　遺跡出土ト骨・ト甲一覧表（2/3）

遺跡No.	出土遺跡	動物種	部位/年齢/個数	時期	所在地
19	毘沙門C洞窟遺跡	シカ	肩甲骨2点	弥生時代後期	神奈川県三浦市南下浦町毘沙門
		イノシシ	肩甲骨1点		
20	毘沙門B洞窟遺跡	シカ	肩甲骨1点 肋骨1点	弥生時代後期	神奈川県三浦市南下浦町毘沙門
21	雨崎洞窟遺跡	シカ	肩甲骨4点	弥生時代後期	神奈川県三浦市南下浦町金田
22	海外洞窟遺跡	シカ	肩甲骨2点 肋骨2点	弥生時代後期	神奈川県三浦市海外町
		イルカ	肋骨1点		
23	浜諸磯遺跡	ウマ	肋骨13点	8世紀初頭	神奈川県三浦市三崎町諸磯
		ウミガメ	腹甲1点		
		ウマ	肋骨1点	8C	
		ウミガメ	腹甲1点		
24	池子遺跡群	シカ	肩甲骨L1点 肩甲骨R3点 肩甲骨左右不明2点	弥生時代中期後半	神奈川県逗子市池子米軍提供用地内
		イノシシ	肩甲骨L1点		
		シカ	寛骨L1点	弥生時代後期～古墳時代前期	
		シカ	肩甲骨L1点 寛骨1点 肋骨1点	弥生時代後期～古墳時代	
		シカ	肩甲骨R2点 寛骨R1点 寛骨左右不明1点 胸骨1点	弥生時代末～古墳時代前期	
		イノシシ	肩甲骨L2点 肩甲骨R1点		
		シカ/イノシシ	肩甲骨左右不明2点 肋骨1点		
		シカ	寛骨R1点	古墳時代前期～中期	
		イノシシ	肩甲骨1点		
25	千種遺跡	シカ	肩甲骨1点	弥生時代終末or古墳時代前期	新潟県佐渡郡金井町千種
26	浜端洞窟遺跡	シカ	肩甲骨3点	古墳時代前期	新潟県佐渡郡相川町高瀬
27	畝田遺跡	シカ	肩甲骨L1点	古墳時代前期(4C)	石川県金沢市
28	四ツ屋遺跡	シカ	肩甲骨1点	弥生時代後期（箱清水期）	長野県長野市
29	生仁遺跡	シカ	肩甲骨R3点	弥生時代後期	長野県更埴市屋代生仁
30	屋代遺跡群	シカ	肩甲骨2点	弥生時代終末	長野県更埴市大字雨宮字町浦・北野
		ウシ	肋骨1点	古代1期（7C）	
		ウシ	肋骨2点	古代1期前半（7C）	
31	石川遺跡	シカ	肩甲骨5点	弥生時代後期	静岡県清水市石川
		イノシシ	肩甲骨2点		
32	長崎遺跡	シカ	肩甲骨L2点 肩甲骨R2点	弥生時代後期中葉～後葉	静岡県清水市長崎
		イノシシ	肩甲骨L1点 肩甲骨R2点		
33	登呂遺跡	シカ	肩甲骨L2点 肩甲骨R2点	弥生時代後期	静岡県静岡市敷地
34	神明原・元宮川遺跡	シカ	肩甲骨1点 肋骨2点	6C～平安時代	静岡県静岡市大谷・西大谷・水上・宮川・高松
35	白岩遺跡	シカ	肩甲骨1点	弥生時代後期	静岡県小笠郡菊川町白岩
36	朝日遺跡	シカ	肩甲骨3点	弥生時代中期	愛知県春日井郡清洲町
		シカ	肩甲骨1点	弥生時代中期～後期	
37	唐古・鍵遺跡	シカ	肩甲骨L1点	弥生時代前期	奈良県磯城郡田原町
		イノシシ	橈骨L1点 大腿骨1点		
		シカ	肩甲骨L1点 肩甲骨R1点	弥生時代中期	
		イノシシ	肩甲骨L4点 肩甲骨R6点		
38	日下遺跡	シカ	肩甲骨1点	古墳時代中期	大阪府東大阪市日下町

表1　遺跡出土ト骨・ト甲一覧表（3/3）

遺跡No.	出土遺跡	動物種	部位/年齢/個数	時期	所在地
39	鬼虎川遺跡	イノシシ	肩甲骨2点	弥生時代後期?	大阪府東大阪市
40	亀井遺跡	イノシシ	肩甲骨R1点	弥生時代中期	大阪府八尾市南亀井町
		シカ	肩甲骨R1点	弥生時代中期	
		イノシシ	肩甲骨R1点	弥生時代中期後半	
41	森之宮遺跡	シカ	肩甲骨1点	弥生時代中期～後期	大阪府大阪市森ノ宮中央
42	青谷上寺地遺跡	シカ	肩甲骨R1点	弥生時代前期末～中期	鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地ほか
		イノシシ	肩甲骨L1点 肩甲骨R1点		
		シカ	肩甲骨L2点 肩甲骨R1点	弥生時代中期中葉～後葉	
		イノシシ	肩甲骨L4点 肩甲骨R7点		
		イノシシ	肩甲骨L2点 肩甲骨R3点	弥生時代中期後葉	
		シカ	肩甲骨L1点 肩甲骨R1点	弥生時代中期～古墳時代前期初頭	
		イノシシ	肩甲骨L6点 肩甲骨R10点		
		シカ	肩甲骨L1点 肩甲骨R1点 肩甲骨左右不明1点	弥生時代後期初頭～後葉	
		シカ	肩甲骨L2点 肩甲骨R4点	弥生時代後期中葉～後葉	
		イノシシ	下顎骨2点 肩甲骨L3点 肩甲骨R2点		
		シカ	肩甲骨R1点	弥生時代後期	
		シカ	肩甲骨L3点	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭	
		イノシシ	肩甲骨L1点 肩甲骨R3点		
		シカ	肩甲骨L1点	弥生時代後期～古墳時代	
43	古浦遺跡	シカ	中足骨1点	弥生時代前期後葉?	島根県八束郡鹿島町恵曇
44	足守川加茂A遺跡	シカ	肩甲骨L1点	古墳時代初頭	岡山県岡山市加茂，倉敷市矢部
45	足守川加茂B遺跡	シカ	肩甲骨L6点	弥生時代後期前半	岡山県岡山市加茂，倉敷市矢部
		イノシシ	肩甲骨R2点		
46	上東遺跡	シカ	肩甲骨L1点 肩甲骨R1点	弥生時代後期	岡山県倉敷市上東
		イノシシ	肩甲骨R1点		
		シカ	肩甲骨L3点	古墳時代	
47	宮前川北斎院遺跡	シカ	肩甲骨3点	弥生時代後期	愛媛県松山市北斎院町
48	斎院烏山遺跡	シカ	肩甲骨L1点	弥生時代後期	愛媛県松山市北斎院町
		イノシシ	肩甲骨R1点		
49	阿方遺跡	シカ	肩甲骨L1点	弥生時代前期	愛媛県今治市阿方
50	串山ミルメ浦遺跡	ウミガメ	背甲/腹甲17点	6C末～7C	長崎県壱岐市
51	カラカミ遺跡	シカ	肩甲骨2点	弥生時代後期前半	長崎県壱岐郡勝本町
		イノシシ	肩甲骨2点		
		シカ	肩甲骨1点	弥生時代後期中頃	
52	原ノ辻遺跡	シカ	肩甲骨7点	弥生時代後期前半	長崎県壱岐郡芦部町深江
		イノシシ	肩甲骨2点		
53	志多留貝塚	アカウミガメ	腹甲1点	古墳時代後期～奈良	長崎県対馬市

※1出土時期、出土動物種もしくは部位の不明なものに関しては除き、表2に記載する。
※2山王遺跡の多賀前地区と八幡地区、浜諸磯遺跡のC地点（砂丘南端部）とE地点、池子遺跡のNo.1-AとNo.4は同一遺跡として同じ欄に記載している。
※3報告書によってはニホンジカとではなくシカとのみ記載されているものがあるが、現在までに本州でエゾジカと思われるものは出土していないため、シカと記載したものはすべてニホンジカのことを指す。北海道の貝取澗2洞窟出土の肩甲骨はエゾジカである。
※4こうもり穴洞穴のサルは層位不明であるが、他の卜骨はすべて弥生時代後期～古墳時代に比定されるため、()として記した。

表２　遺跡出土の卜骨・卜甲（一覧表より除外したもの）

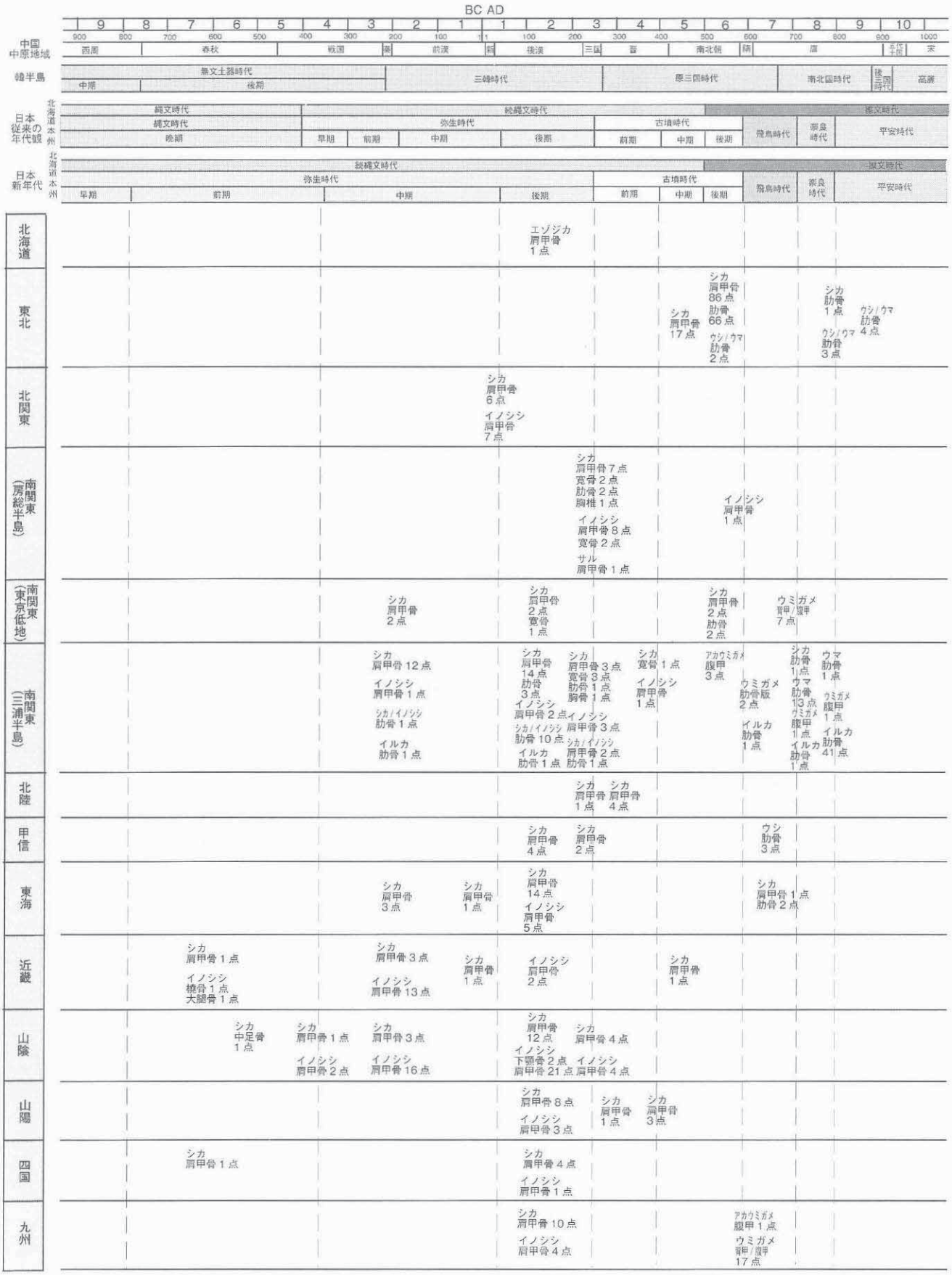
遺跡No.	出土遺跡	所在地
54	表杉ノ入遺跡	宮城県塩釜市表杉ノ入
55	鳳寿寺遺跡	宮城県七ヶ浜町東宮浜
56	市川橋遺跡	宮城県多賀城市市川，高崎，浮島
57	草刈遺跡	千葉県市原市
58	日向遺跡	神奈川県横須賀市
59	由比ヶ浜遺跡	神奈川県鎌倉市由比ヶ浜
60	伊場遺跡	静岡県浜松市東伊場
61	神明社貝塚	愛知県知多郡南知多町
62	坪井遺跡	奈良県橿原市・桜井市
63	南方（済生会）遺跡	岡山県岡山市
64	津島江道	岡山県岡山市

※表1より除外した出土時期、出土動物種もしくは部位の不明なものの遺跡名のみ記載する。

表３　韓半島出土の卜骨遺跡表

遺跡No.	出土遺跡	動物種	部位/年齢/個数	時期	所在地
a	虎谷洞遺跡	シカ	肩甲骨3点	初期鉄器時代	咸鏡北道茂山郡
		不明	肩甲骨1点		
b	江門洞遺跡	シカ	肩甲骨4点 尺骨1点	原三国時代	江原道江陵市
		イノシシ	肩甲骨2点 下顎骨1点		
c	二城山城遺跡	不明	肋骨1点	統一新羅時代	京畿道廣州郡
d	余万里遺跡	シカ	寛骨1点 肩甲骨5点	三国時代	全羅北道群山市
		不明	肋骨21点 肩甲骨4点		
e	新昌洞遺跡	シカ	肩甲骨10点	初期鉄器時代	光州市北區
		イノシシ	肩甲骨3点		
		ウシ	肩甲骨1点		
f	郡谷里遺跡	シカ	肩甲骨14点	原三国時代	全羅南道海南郡
		イノシシ	肩甲骨7点		
		不明	肩甲骨2点		
g	金坪遺跡	シカ	肩甲骨1点	原三国時代	全羅南道寶城郡
		不明	肩甲骨1点		
h	林堂遺跡	シカ/イノシシ	肩甲骨14点	三国時代	慶尚北道慶山市
		不明	肋骨4点		
i	樂民洞遺跡	シカ	肩甲骨5点	三国時代	釜山市東萊區
		イノシシ	肩甲骨2点		
		ウシ	肩甲骨1点		
j	朝島遺跡	シカ	角1点	原三国時代	釜山市影島區
k	府院洞遺跡	シカ	角1点 肩甲骨1点	三国時代	慶尚南道金海市
		イノシシ	肩甲骨1点		
l	鳳凰臺遺跡	シカ	肩甲骨1点	三国時代	慶尚南道金海市
m	南山遺跡	不明	肩甲骨	三国時代	慶尚南道昌原市
n	勒島遺跡	シカ	肩甲骨20点以上	初期鉄器時代	慶尚南道泗川市
o	煙臺島遺跡	ウシ	肩甲骨1点	三国時代	慶尚南道統營郡

※金建洙の「韓半島の卜骨」の表にならったが、空白部分は殷和秀の「韓国出卜骨에對한」に示されているものを使用した。



※年代が判明しているが、あまりにも長い年代幅しかかっていないものは除外した。

図２　卜骨・卜甲の地域別・時期別図

のものなどが多く、議論に用いることが可能な資料は全資料中の60%にとどまる。また種の同定については、今後実見する必要があるものも多い。今回網羅的に集成したが、この数はまだまだ増加する可能性はある。以下、弥生時代から古代にかけて遺跡出土の全時期の卜骨・卜甲の概要を述べていく。

図2に遺跡から出土した卜占使用の動物の種類、部位、点数を時期別、地域別に示した。時期が不明なものや動物の種類もしくは部位が判明していないものは除外し、また時期が判明していても長い年代幅のものは除いた。また年表に関しては、弥生時代は国立歴史民俗博物館のAMSグループが提示している新年代にのっとって作成した（(西本編，2007・国立歴史民俗博物館編，2007)。

出土地域は北海道から九州まで出土しているが、九州本島及び南西諸島では出土例がない（図1)。出土点数は東北地方が最多であり、179点出土している。これは古墳時代及び古代に多賀城周辺の山王遺跡及びその周辺遺跡からの出土によるところが大きい。以前より指摘されていた三浦半島はやはり出土点数が129点と東北地方に次いで多い。出土遺跡数は12例と最多である。続いて山陰地方が66点と多いが、古浦遺跡の1点の出土を除くとすべて青谷上寺地遺跡からの出土である。九州は山陰に次ぐ出土数だが、すべて壱岐・対馬からの出土である。南関東（房総半島)、東海、近畿、南関東（東京低地)、山陽、北関東、甲信、四国、北陸、北海道はすべて30点以下の出土である（図3)。北海道は貝取澗2洞窟続縄文の恵山文化（A.D.～B.C.境界年～B.C.300）にエゾジカの雄の左肩甲骨が1点出土

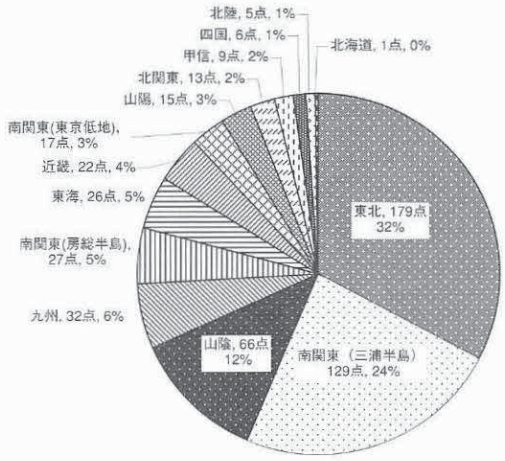


図3　地域別出土点数

しているのみである。

(2) 卜骨・卜甲の遺跡出土時期

日本における卜骨は弥生時代前期からみられる[6]。弥生時代の前期出土の資料は奈良県の唐古・鍵遺跡、愛媛県の阿方遺跡、島根県の古浦遺跡の3例がある[7]。卜骨は縄文時代には例がなく、また弥生時代早期の遺跡でもまだ出土していない。弥生時代中期には各地での出土例がみられ、後期になるとさらに増加する。古墳時代や古代からも多数の出土例があるが、遺跡出土資料としては中世以降にはみられない。

一方、卜甲は古墳時代後期の土坑墓覆土上面から出土したとされる間口洞穴出土の2点が6世紀代に遡る可能性が高く、現時点では最古の事例と考えられているが、伴出遺物が乏しく細かな年代は特定できない（笹生，2006)。また、対馬の志多留遺跡出土のものは、出土した層が二次堆積層であり、坂田は縄文時代の貝塚が河川の氾濫か何かによって押し流されて二次堆積し、いつの時代のものであるかわからないとしているが（坂田，1976)、永留はこれを縄文後期の貝塚とから流出した遺物と弥生時代前期から中期の包含層より出土した遺物の混在する二次堆積層であることから、明確に時期をおさえることはできないが弥生時代中期の可能性が大きいとしている（永留，1982)。本論では二次堆積層であるため、これを弥生時代のものとはせず、笹生のいう6世紀から8世紀代の可能性が高いと考える。現在までに遺跡出土の卜甲は6遺跡33点が知られているが、6世紀末から8世紀初頭までの間に集中する。

(3) 使用される動物種

a.　卜骨

卜骨に使用される動物はシカ、イノシシ、イルカ、ウミガメ、ウマ、ウシ、サルがある。その中で最も出土量が多いのはシカの326点である。シカの肩甲骨が頻繁に使用されることは文献や先行研究からも明らかであったが、近年の発掘例によって動物種のバラエティは増加していることがわかる。シカに次いではイノシシが多い。100点の出土がみられる。イノシシの使用も先行研究から明らかであったが、資料数が増加してもやはりシカがイノシシの3倍以上という大きく上回った出土例を誇るのは変わ

らない。現在、ブタと確定されている資料はないが、長野県の屋代遺跡群の肩甲骨1点がブタの可能性が高いとして報告されている[8]。シカ、イノシシ以外ではイルカが46点、ウミガメが32点、ウマが14点、ウシが4点、ウシもしくはウマが9点、サルが1点出土しており、これらは全体の20%を占める（図4）。弥生時代からすでに卜占にはシカ、イノシシだけでなくイルカやサルなど違う動物種も使用しており、ウミガメやウシ、ウマの使用は古墳時代後期以降からみられる。

部位については肩甲骨だけでなく、下顎骨や四肢骨、寛骨、肋骨、椎骨、胸骨など様々な部位を使用している（図5）。このことから肩甲骨のみを選択していたわけではないことがわかる。現在、卜骨の最古出土例として挙げられている弥生前期の唐古・鍵遺跡の資料についてもシカの肩甲骨以外にイノシシの橈骨と大腿骨を使用するなど、古い時期から肩甲骨以外の部位を用いていたことがわかる。ただし図4からわかるように全体の部位別出土量を見ると、肩甲骨が331点と最多である。次いで肋骨が164点と多く、肩甲骨と肋骨が全体の90%以上を占める。

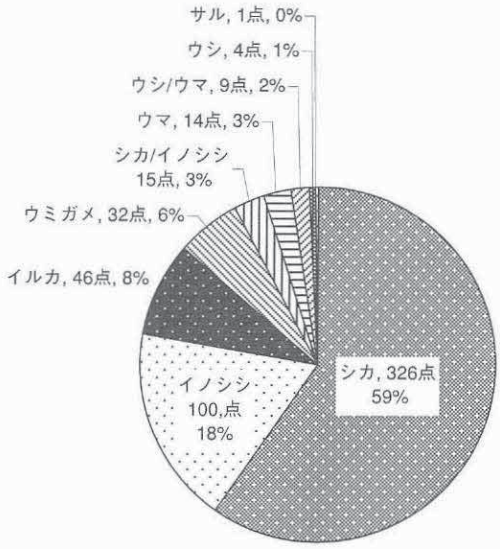


図4　出土動物種別グラフ

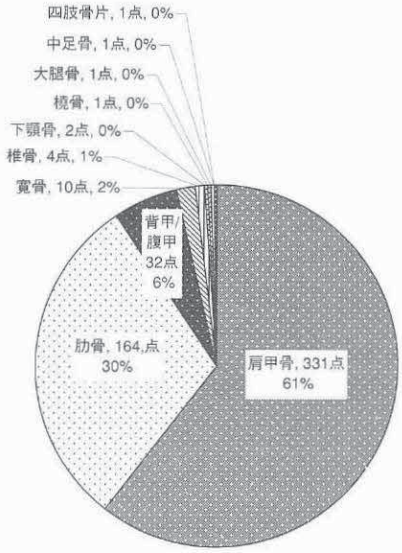


図5　出土部位別グラフ

b.　卜甲

遺跡出土の卜甲に使用される素材はウミガメの背甲骨もしくは腹甲骨である。ウミガメ科の中で種類の判明しているものはアカウミガメだけである。琉球列島を除く日本に生息するカメ目はヌマガメ科のニホンイシガメ、クサガメ、ミナミイシガメ、スッポン、ウミガメ科のアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、オサガメ科の9種である。海に生息するいわゆる一般的にウミガメとよばれるものはウミガメ科とオサガメ科の5種である。

日本の遺跡出土の卜甲がウミガメ科に限定されていることに関しては、様々な要因が考えられるが、文献からは淡水性のカメ類も使用されていたことがわかる。亀崎は『新撰亀相記』や『対馬亀卜伝』での記述より、ニホンイシガメとクサガメが使用されていたことが考えられるとしている（亀崎，2006）。中国で使用される卜甲は淡水性のカメであるのに対して、日本の遺跡出土のカメはウミガメであることには、中国との関連性の希薄さを感じさせるが、文献からは淡水性のカメも使用されていたことが窺え、遺跡出土の資料は動物遺体が残存しにくいということを考えれば、今後、遺跡から淡水性カメの卜甲の検出が期待される。

4.　考察

(1) 地域性

図2に全時代を通しての動物種・部位の変遷を示したが、地域ごとの特徴をみるために、特に、弥生時代の資料を動物種ごとに各地域でまとめてみる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての資料も含む。資料点数の多い関東地方（房総半島、東京低地、三浦半島）と東海、近畿、山陰の4地方について図6～図9に示した。この4つの円グラフより、山陰と

近畿はシカに比べてイノシシの方が多く、東海と関東はイノシシに比べてシカが多いことが明らかである。東海地方より西ではイノシシが全体の6～8割を占めるのに対して、東ではシカが全体の6～8割を占めるという逆転が起きている。東海地方を境にして、シカとイノシシの比率が大きく異なっている。

シカとイノシシの遺跡出土の動物骨の比率について、縄文時代ではイノシシ類とシカの割合が1:1の割合であったのに対して、弥生時代になるとイノシシ類とシカが4:1の割合になることが西本によって指摘されている（西本，1995）。また弥生時代の西日本と東日本のイノシシ類とシカの比率については西日本では明らかにイノシシ類のほうがシカを上回る数が出土するのに対して、東海地方辺りで同程度の数量となり、それより東ではシカのほうが徐々に上回ってくる（西本，1997）。

弥生時代の卜骨使用の動物種でも同様の結果が得られた。これは西本の指摘にもあるように出土イノシシの中にブタが含まれている可能性が考えられる。

世界的にみると骨を使った占法には家畜が使用されているところが多い（新田，1977）。図10に新田が世界の卜占事例として挙げているものを中心に、その他に海外の報告書などから動物種ごとに色分けして世界地図に示してみた。ユーラシア大陸を中心に大きく描画している横線が家畜のみを用いているものであり、その大半がヒツジである。大きな格子目で示しているのが、シカなどの野生種のみを用いている地域である。遊牧民を中心に北半球では家畜を卜骨に用いる地域が多い。後述するが、中国でも卜骨の出現期からヒツジが多く用いられ、岡村は犠牲や神意を伝える卜骨の材料としては家畜のほうが好ましいとされたと述べている（岡村，2000）。

(2) 時期性

近畿地方、山陰地方、四国地方では弥生時代前期からみられるが、山陽地方、壱岐・対馬、北陸地方、房総半島、北海道では弥生時代後期以降に出現する。東北地方は古墳時代中期より以前のものはみられな

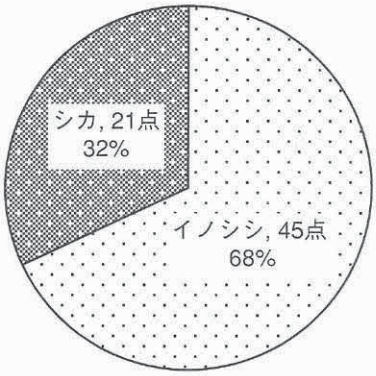


図6　弥生時代の山陰地方における動物種比較

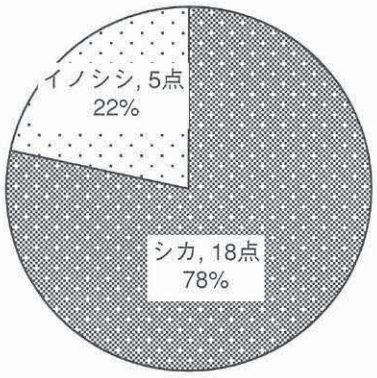


図8　弥生時代の東海地方における動物種比較

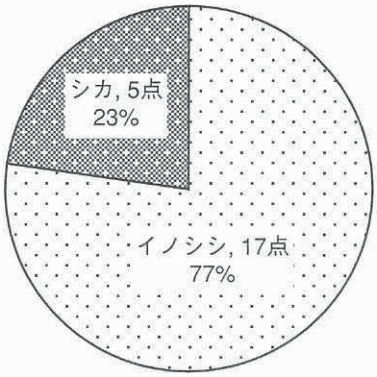


図7　弥生時代の近畿地方における動物種比較

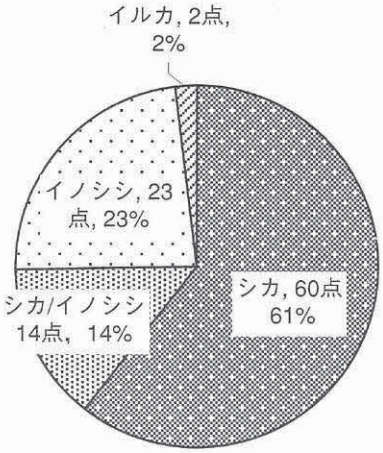


図9　弥生時代の関東地方における動物種比較

い。それぞれの地域での出現時期は図2より西日本を中心に山型を呈していることがわかる。

種類別に出現時期についてみてみると、シカ、イノシシは弥生時代前期よりみられ、イルカもすでに弥生時代中期の遺跡から出土している。ウミガメ及びウシ・ウマは古墳時代後期になってはじめて出現する。

イノシシは房総半島で6世紀後葉～7世紀前葉にかけてのものが1点出土しているが、その他は弥生時代前期より以降ではみられなくなる。しかし、ウミガメやウシ・ウマだけでなく、シカやイルカも後代まで素材として用いられており、7世紀後半律令国家になり中央による卜占の管理が行われ、壱岐、対馬、伊豆には神祇官の卜部がいたが、ウミガメの亀卜を行うこれらの卜部と共に、地方ではその土地独自の素材が使用されていた可能性がある。

(3) 大陸との関連性

a. 中国とのつながり

中国の卜占は紀元前四千年紀に始まり、殷代に最も盛行し、西周代より衰退していった。遺跡出土の最古の例は馬家窰文化の甘粛省武山縣傳家門遺跡であり、紀元前四千年紀後半に位置づけられる。それ以後、卜骨は中国北西部を中心に華北一帯に広がりをみせる。岡村は前四千年紀に家畜のヒツジが出現し、ほぼ同時に骨卜の風習が始まると、神意を伝える卜骨の材料としては、ブタではなく、ヒツジが選別的に用いられたとしている。このことは犠牲や神意を伝える卜骨の材料としては家畜のほうが好ましいとされたと考えている（岡村，2000）。骨卜の盛行とウシ中心の卜骨への転換は殷前期に起こり、中原の殷周文化が及んだ地域ではウシの卜骨とカメの卜甲にほぼ限定され、鑽や鑿の手法も共通であるが、その圏外ではそれぞれ独自の骨卜がおこなわれた（岡村，2000）。

以前は中国の中原地帯ではヒツジ・シカ・ブタ→ウシ→カメの大まかな流れを指摘されていたが（木村，1979）、岡村の集成によれば新石器時代にはシカはほとんど使用されず、中国での初期の事例より既に家畜を使用していたことがわかる。このことは卜骨の起源地との問題とも関連し、岡村は中国西北部に骨卜の起源地を想定する説を支持しており、ヒツジの飼養と骨卜の風習とが外来のものであることを示唆するとしている（岡村，2000）。

※(新田,1977)などをおもに用いて図示した

図10　世界にみられる骨を使った占法分布図

日本の卜骨の起源を、以前は、シカの肩甲骨を用いた卜骨は日本固有のものであり、亀卜は中国から朝鮮を経て日本に入ってきたと考えられてきたが、これは鳥居によれば日本の鹿卜とモンゴルの羊卜の類似性を指摘し、野生動物であるシカを使用するほうがより原始的であると考えたためである（鳥居龍蔵，1975）。松岡は日本に骨を灼く占法がないことから大陸の人々が持ち込んだとした（松岡，1941）。しかし新田や木村は中国東北地方、朝鮮北部ではヒツジ、シカ、イノシシを使用し、また鑽や鑿を作らずに焼灼を行う例があるなど焼灼方法の類似性を指摘し、この地域からの伝播を指摘した（新田，1977・木村，1979）。岡村も山東省や遼寧省の紀元前2000年紀の二里頭文化併行期の岳石文化期の遺跡出土の卜骨にはシカを用いていたことを示し、日本の弥生時代の卜骨との関連性を指摘している（岡村，2000）。つまり、殷後期に最も盛行するウシの卜骨とカメの卜甲は、中原の殷周文化の影響が及んだ地域ではこの2種に集約されていくが、卜骨の最も古い例が見られた甘粛省では西周時代に併行する寺窪文化前期においてもやはりヒツジの量が多い（岡村，2000）。このように日本を中国の東夷と見た場合、周辺域での種の違いが指摘されてきたが、前述のように、西日本と東日本のシカとイノシシの比率の違いには家畜化の問題も関わってくると考えられ、卜骨の素材についての検討を起源地の問題と絡めて再検討する必要がある。

b. 韓国とのつながり

韓国の卜骨の出土遺跡はこれまでに15例が報告されているが（金，2002・殷，1999）、卜骨に用いられた動物種はシカ、イノシシ、ウシの3種に限られている。部位は肩甲骨が最も多く、次いで肋骨が多いが、シカの角や寛骨、尺骨、イノシシの下顎骨も使用している。金によれば動物遺体の量の多いところではシカとイノシシの肩甲骨を主に使用しているが、少ないところでは肋骨や角、寛骨、尺骨、下顎骨などの部位も使用し、材質の選択性が認められる指摘している（金，2002）。これは日本の弥生時代の卜骨と非常によく似た組成であることが指摘されている（渡辺，1995・殷，1999・金，2002）。

中国から韓半島に卜骨が入ったのは茂山虎谷洞遺跡などの初期鉄器時代が最も古い例として挙げられているが、金は虎谷洞遺跡は青銅器時代に属する遺構もあるので、青銅器時代まで遡る可能性もあるとしている（金，2006）。韓半島全域への拡大は原三国時代であり、統一新羅時代まで使用されている。日本の弥生時代の年代が以前に比べて古くなっていることから、現在までには韓国での卜骨資料は日本のものより古い資料が出土していない。韓半島との類似性についてさらに考察するためにも、今後の韓半島での卜甲も含めた資料の増加に期待する。伝播の問題を指摘するには、卜骨・卜甲のどちらの出土の重要であり、また卜骨に関しても野生種か家畜種かの区別のためにも種の同定が非常に重要であると考えられる。しかし、現在韓半島の遺跡出土の卜骨の大半が貝塚からの出土ということからも骨の残存状態との関係性も無視できないため、これも考慮に入れた集成が望まれる。

(4) 今後の課題

前述のように、東海地方を境にその西と東にシカとイノシシの比率に大きな差が見られたが、この要因の一つに家畜化の問題が考えられる。弥生時代にブタがいただろうことは指摘されているが（西本，1997）、これは西日本に持ち込まれたブタが東日本ではそれほど普及していなかったことが考えられる。卜占にどの動物の骨を使用するかについては、弥生社会のシャーマニズムの中では非常に重要であり、その素材が持つ意味が重視される。卜骨が中国ではヒツジの飼養との関連性が指摘されているように、牧畜つまり家畜との関連が指摘される。弥生時代では佐賀県の菜畑遺跡や奈良県の唐古・鍵遺跡などでブタの下顎骨に穿孔し、そこに棒を通したり、下顎連合部を棒にかけた例などがみつかっており、動物儀礼の中での家畜の役割を今後再検討する必要がある。

また卜占内容も素材選びに大きく関連してくると思われる。渡辺がいうように占われた内容が従来いわれてきたような農耕祭祀に偏るのではなく、もっと多様であった可能性がある（渡辺，2002）。中国の殷代の占い内容を見ても、祭祀・征伐・狩猟・旅行・農耕の成否・晴雨・病気や一旬（十日間）の吉凶などであり、非常に多岐にわたる（熊谷，1975）。日

本でもその卜占内容が多様であったならば、素材選びの多様性との関連も無視できない。

むろん素材の選別理由として、どの動物のどの部位でもよいわけではなく、焼灼をした際に焼けひびが入りやすいものを選択していたと考えられる。肩甲骨や寛骨、椎骨の棘部分や、肋骨というように比較的厚みのないものを使用している。四肢骨を使用したものでも古浦遺跡の例に見られるように、縦に半截して研磨した後に焼灼を行っている。また中国の殷代から周代の長江中上流域にはハクレンやソウギョといった大型魚類の鰓蓋骨を使用しているものや（蒋剛，2005）、ヨーロッパに見られるガチョウやニワトリなどの鳥類の胸骨を用いた例など（新田，1977）、薄く平坦な面をもつ部位を選択していることがわかる。これは卜占の技術面からの必要性のためである。このような部位の持つ形態的特長も考慮した上で、さらに集成を進める必要がある。

また、卜占終了後の卜骨・卜甲の取り扱いについては、青谷上寺地遺跡のイノシシの左右の肩甲骨を関節上結節（図 11）を合せたものを一単位とし、これを 3 組東西方向に列状に配置した例を除けば、その大半は特別な取り扱いを受けることなく廃棄されている。これは卜骨・卜甲がシャーマニズム儀礼の一要素を持つが、儀礼終了後にその威力・効力を欠如するために儀礼場にそのまま廃棄されると考えられるが、これについても大陸との比較を行いたい。

おわりに

本論では卜骨・卜甲そのものが持つ意味は非常に大きいと考え、遺跡出土の資料の集成を行い、1000 点近い資料が出土していることが明らかになった。

素材選びが重要であるという観点から、動物種・部位を中心に述べてきたが、素材の選別理由として、神澤が指摘するようにシカの肩甲骨以外はすべて代用品であるという考え方もできるが、著者は日本出土の卜骨の素材の多様性は日本列島を西から東へと卜占が伝播して行った過程でその地域的な多様性が起こったと考える。東海地方より西ではイノシシが多くその素材に用いられ、東ではシカの利用が多く見られる。その中で、例えば、壱岐・対馬や三浦半島のような地域では海とのつながりが強く、その影響から独自の素材を使うといったような地域独自の卜占の確立が起こったと考えられる。

謝辞

本論をまとめるにあたり、国立歴史民俗博物館教授の西本豊弘先生には多くのご指導をいただきました。総合研究大学院生の金憲奭氏には韓国語の文献の翻訳などご助力を受けました。また、國學院大學の杉山林継教授、吉田恵二教授、内川隆志准教授、

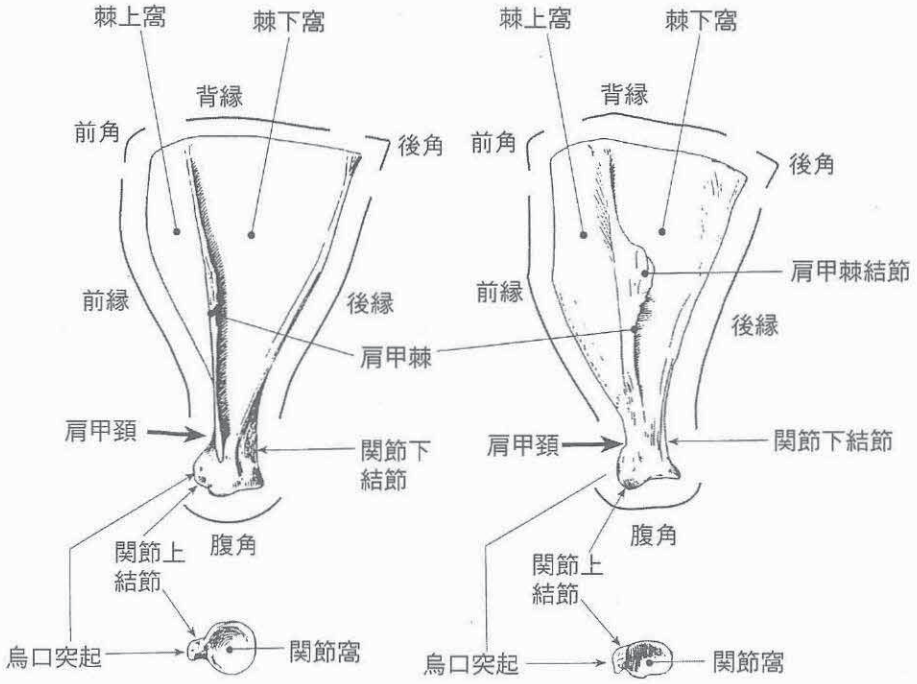


図 11　肩甲骨の部位の名称（左：シカ，右；イノシシ）

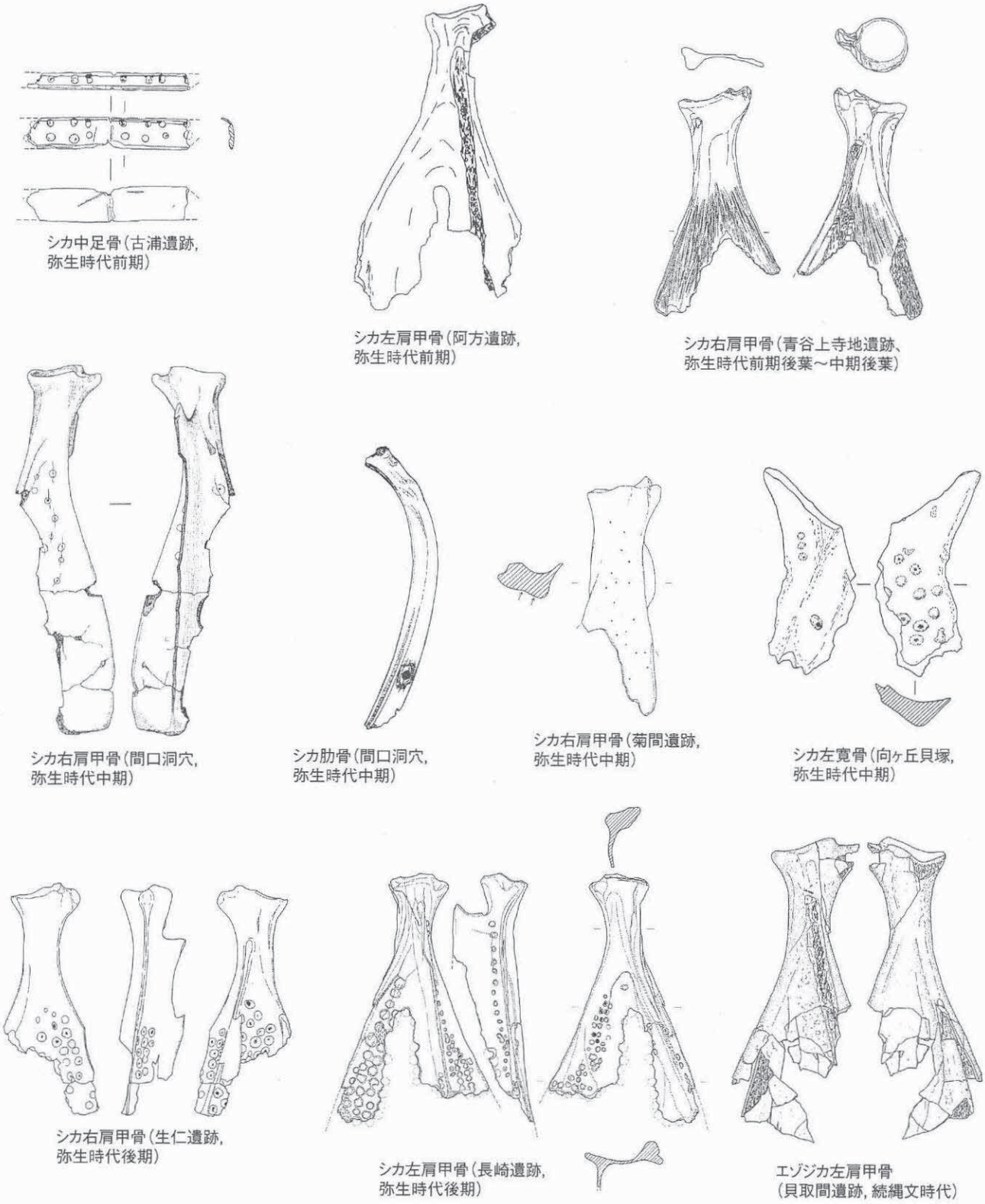
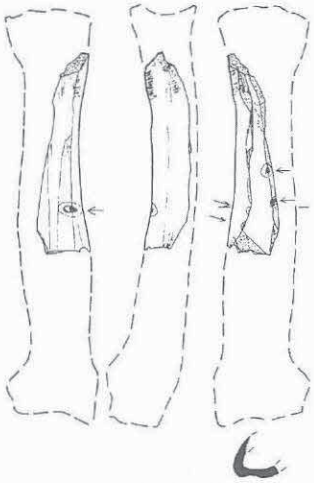
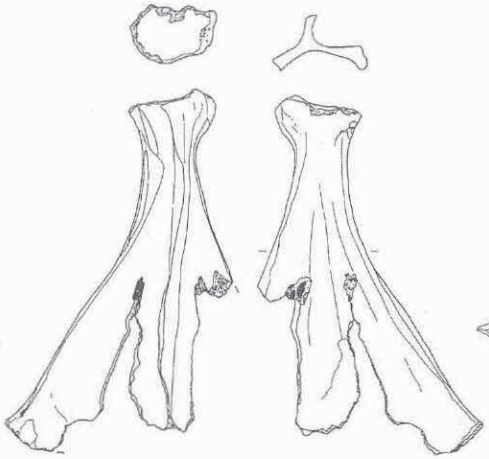


図 12　シカを素材に用いた卜骨

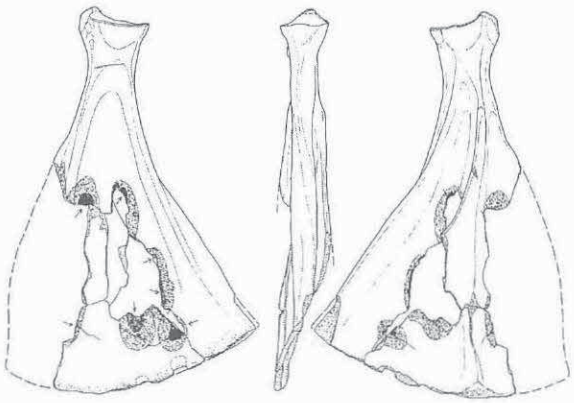


イノシシ左橈骨（唐古・鍵遺跡，
弥生時代前期）

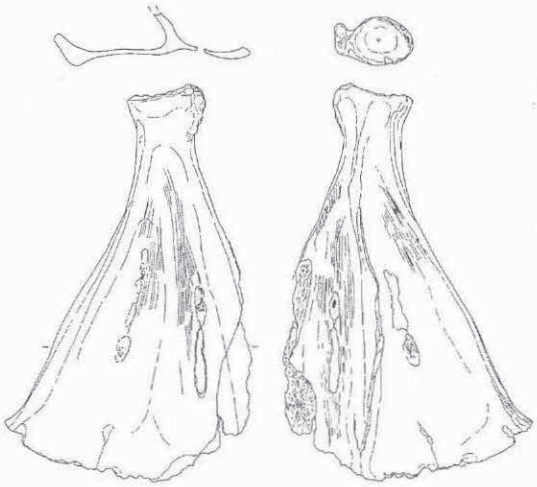


イノシシ左肩甲骨（青谷上寺地遺跡，
弥生時代前期後葉～中期後葉）

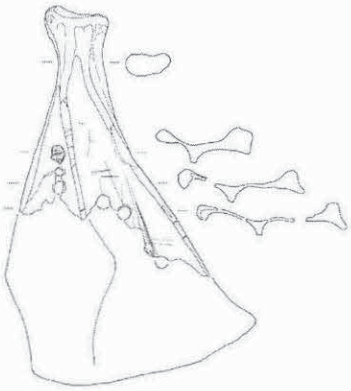
イノシシ下顎骨（青谷上寺地遺跡，
弥生時代中期）



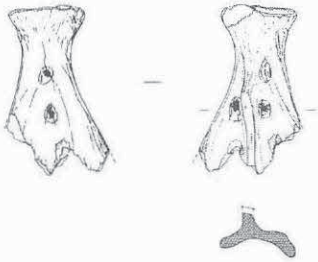
イノシシ左肩甲骨（唐古・鍵遺跡，弥生時代中期）



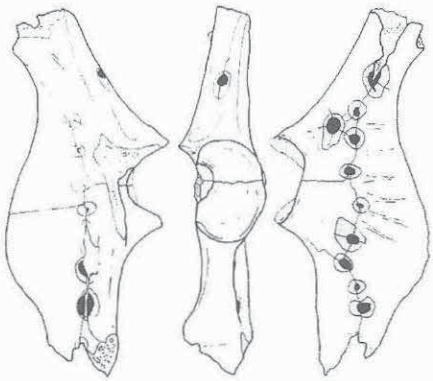
イノシシ右肩甲骨（青谷上寺地遺跡，弥生時代中期）



イノシシ右肩甲骨（新保田中村前遺跡，
弥生時代中期～後期）



イノシシ右肩甲骨（足守川加茂 B 遺跡，
弥生時代後期）



イノシシ左寛骨（こうもり穴洞穴，
弥生時代後期～古墳時代前期）

図 13　イノシシを素材に用いた卜骨

加藤里美講師には様々な面でご支援いただき、論文掲載の機会を与えていただきました。厚くお礼申し上げます。

註

(1) カメの甲羅は外側がうすい角質の甲板、内側がかたい甲骨板で形成されており、卜占に用いられるものは内側の甲骨板である。

(2) 鑽は錐状の工具を使ってあけた浅い窪みを指し、鑿は鑿状の工具を使ってあけた深い窪みを指すが、日本の遺跡出土の卜骨については神澤が分類しているが、第V形式の四角くあけられた孔についても鑽の字をあてているのでそれにのっとる。

(3) 弥生時代の鑽を施したものとして青谷上寺地遺跡にそれらしきものが2点みられるが、基本的には古墳時代以降の資料に多い。

(4) 資料の集成については基本的には報告書の記載にのっとっているため、弥生時代の資料については青谷上寺遺跡から240点にのぼる資料が出土しているということだが、報告書の記載では116点の出土にとどめているため、ここではそれに従った。現在も整理作業中だということからも、整理後の報告を待ちたい。

(5) 卜甲出土遺跡については6例を挙げているが、この他に日向遺跡、蓼原遺跡、由比ヶ浜遺跡での出土の可能性があるが詳細は不明である。

日向遺跡については1989年の『串山ミルメ浦遺跡』報告書に「亀卜の出土は数点確認され」と記載されており、これは神奈川県下の出土資料については、横須賀市自然人文博物館の大塚真弘氏の御教示を得たと記されている。また1991年の『浜諸磯遺跡』報告書に卜甲出土遺跡として挙げられており、『横須賀考古学会年報』8に記載されていると記されていたため探したが、該当するものはなく、『横須賀市文化財調査報告書第26集　埋蔵文化財調査概報集Ⅰ』では卜骨の出土が見られるものの、卜甲はみられない。

蓼原遺跡については『串山ミルメ浦遺跡』報告書に亀卜出土の遺跡として挙げられているが、ウミガメのことは書いておらず、「シカ、イノシシの肋骨を使用している」と記載されており、日向遺跡と同じく神奈川県下の出土資料については、横須賀市自然人文博物館の大塚真弘氏の御教示を得たと記載されている。

由比ヶ浜遺跡については『浜諸磯遺跡』報告書に卜甲出土遺跡として挙げられているが、参考文献が『神奈川県遺跡研究発表会発表要旨11』と記されており、確認できていない。

(6) 渡辺誠は2002年の『考古学ジャーナル　492』で確実な弥生前期の資料は発掘されていないとしているが、岡村秀典は2005年の『弥生農耕の起源と東アジア―炭素年代測定法による高精度編年体系の構築―　平成16年度研究成果報告』の中で阿方遺跡と古浦の例が最古としている。1995～1998年に調査が行われた愛媛県今治市の阿方遺跡は報告書中では弥生時代前期と記載されているが、梅木謙一は2001年の『久保和士君追悼考古論文集』の中で愛媛県出土の動物遺体についてまとめており、その中ではこの卜骨は弥生時代前期末～中期前葉としている。

(7) 島根県古浦遺跡出土のシカの中足骨を使用した卜骨については金関丈夫氏が「卜骨談義」として1963年8月25日から9月1日にかけて島根新聞に8回にわたって連載されたものを藤田等氏が2005年の『古浦遺跡』に再録した中では弥生時代前期とされているが、神澤勇一氏は焼灼形式その他から弥生時代中期・後期の諸例との間に共通性、連接性が認められないとし、古墳時代のものとするのが適当であるとしている。

(8) この資料は報告書に時期が記載されていなかったため表1には掲載しなかった。

参考文献

浅原達郎
2006 「殷代の甲骨による占いと卜辞」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』

伊那国歴史博物館
2005 『平成17年度秋季特別展　伊那国動物ふれあい展―倭人が見た動物たち』

殷　和秀
1999 「韓国出卜骨에對한」『湘南考古學報』10

池澤　優
1987 「甲骨断代分期上の最近の問題点―中国における「歴組」論争」『考古学ジャーナル』№.281

大江　篤
2006 「亀卜と怪異―媒介者としての卜部」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』

大阪府立弥生文化博物館編
1998 『平成10年春季特別展図録　縄紋の祈り・弥生の心―森の神から稲作の神へ』

大阪府立弥生文化博物館
1992 『平成4年春季特別展　弥生の神々―祭りの源流を探る』

大阪府立弥生文化博物館
1996 『平成8年春季特別展　卑弥呼の動物ランド―よみがえった弥生犬』

大阪府立弥生文化博物館
1999 『平成11年春季特別展　渡来人登場―弥生文化を開いた人々』

大阪府立弥生文化博物館
2006 『大阪府立弥生文化博物館　弥生画帖―弥生人が描いた世界』

大谷光男
1978 『邪馬台国時代』 雄山閣

大林太良
1977 『邪馬台国―入墨とポンチョと卑弥呼』 中公新書

岡村秀典
2000 「殷代における畜産の變革」『東方學報』京都第72册

岡村秀典
2002 「中國古代における墓の動物供犠」『東方學報』京都 第74册
岡村秀典
2005 『中国古代王権と祭祀』
岡村秀典
2005 「中国農耕儀礼の東方伝播」『平成16～20年文部科学省・科学研究費補助金 学術研究費（2） 弥生農耕の起源と東アジア―炭素年代測定による高精度編年体系の構築 平成16年度研究成果報告』（研究代表者西本豊弘）
落合淳思
2006 「殷代占卜工程の復元」『立命館文學』第594号
金関丈夫
2004 「卜骨談義」『古浦遺跡』 古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会
亀崎直樹
2006 「卜甲に関する文献に対する生物学的解釈」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』
神澤勇一
1976 「弥生時代、古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』38
神澤勇一
1979 「骨卜と亀卜―関東古墳時代の事例と対馬の亀卜」『えとのす』第11号
神澤勇一
1987 「日本の卜骨」『考古学ジャーナル』№.281
神澤勇一
1987 「卜骨」『弥生文化の研究』第8巻（金関恕・佐原眞編）
神澤勇一
1990 「呪術の世界―骨卜のまつり」『考古学ゼミナール 弥生人のまつり』（石川日出志編） 六興出版
北浦弘人
2002 「鳥取県青谷上寺地遺跡出土の卜骨」『考古学ジャーナル』№.492
北浦弘人
2008「青谷上寺地遺跡出土卜骨の属性類型の再検討について」『鳥取県埋蔵文化財センター 調査研究紀要』2
木村幾多郎
1979 「長崎県壱岐島出土の卜骨」『考古学雑誌』第64巻4号
金 建洙
2002 「韓半島の卜骨」『考古学ジャーナル』№.492
熊谷 治
1975 「中国古代の巫祝」『えとのす』第3号
熊谷 治
1976 「対馬における亀卜―亀の神事について」『えとのす』第6号
甲元真之
1975 「朝鮮・対馬海峡」『えとのす』第2号
国立歴史民俗博物館編
2007 『企画展示図録 弥生はいつから!? 一年代研究の最前線』
笹生 衛
2006 「考古学資料から見た古代の亀卜・卜甲と卜部」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』
桜井徳太郎
1975 「シャマニズムの諸問題―とくにシャーマニック・トランスを中心として」『えとのす』第3号
蔣剛
2005 「重慶、顎西地区商周時期甲骨的類型学研究」『江漢考古』
島田尚幸
2006 「動物学からみた「亀」卜考」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』
末次信行
1987 「「西周」時代の甲骨」『考古学ジャーナル』№.281
千田稔・宇野隆夫編
2001 『亀の古代学』 東方出版
千葉孝弥
2002 「多賀城市山王遺跡出土の卜骨」『考古学ジャーナル』№.492
北浦弘人
2008「青谷上寺地遺跡出土卜骨の属性類型の再検討について」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』2
朝鮮總督府
1933 『朝鮮の占卜と豫言』 朝鮮總督府
鼎軒田口卯吉全集刊行會編
1927 『鼎軒田口卯吉全集 文明史及社會論』
戸田靖久
2006 「灼甲の実験―『対馬亀卜談』の方法」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』
鳥居龍蔵
1975 『鳥居龍蔵全集』第1巻 朝日新聞社
永留久恵
1982 「対馬の亀卜」『賀川光夫先生還暦記念論集』
中村 勉
2002 「三浦半島における卜骨・卜甲研究の現状」『考古学ジャーナル』№.492
西本豊弘
1995 「縄文人と弥生人の動物観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第61集
西本豊弘
1997 「弥生時代の動物質食料」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集
西本豊弘編
2007 『新弥生時代の始まり第2巻 縄文時代から弥生時代へ』 雄山閣
新田栄治
1977 「日本出土卜骨への視角」『古代文化』第29巻第12巻
春成秀爾
1991 「角のない鹿―弥生時代の農耕儀礼」『横山浩一

先生退官記念論文集Ⅱ　日本における初期弥生文化の成立』
春成秀爾
1993「豚の下顎骨懸架―弥生時代における辟邪の習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
春成秀爾
2007『儀礼と習俗の考古学』 塙書房
藤井弘章
2006「ウミガメ捕獲習俗からみた卜甲調達の地域と技術」『亀卜―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』
藤野岩友
1960「亀卜について」『國學院大學日本文化研究所紀要』第六輯
松井　章
2003「動物祭祀」『神々のいる風景』(赤坂憲雄・中村生雄・原田信男・三浦佑之編)
松岡静雄
1941『日本固有民族信仰』 刀江書院
三品彰英
1970『邪馬台国研究総覧』 創元社
M. エリアーデ
1974『シャーマニズム―古代的エクスタシー技術』(堀一郎訳) 冬樹社
渡辺　誠
1991「郡谷里貝塚出土の卜骨研究―韓国における考古民族学的研究・V」『名古屋大学文学部研究論集史学』vol.37 - 110
渡辺　誠
1995「全羅南道郡谷里貝塚出土の卜骨」『日韓交流の民族考古学』
渡辺　誠
2002「卜骨・卜甲でなにが占われたのか」『考古学ジャーナル』№.492

遺跡リスト引用文献

北海道開拓記念館　2001『北海道開拓記念館研究報告第17号　貝取澗2洞窟遺跡』
後藤勝彦　1981「宮城県七里ヶ浜町東宮浜凰寿寺貝塚発見の卜骨について」『東北歴史資料館研究紀要』第7巻
加藤孝　1987「表杉ノ入貝塚」『宮城縣史』34(資料篇11)(宮城縣史編纂委員會編)
宮城県多賀城跡調査研究所　1992『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　多賀城跡』
多賀城市教育委員会　2004『多賀城市文化財調査報告書第75集　市川橋遺跡―城南土地区整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ』
宮城県教育委員会　1991『宮城県文化財調査報告書第141集　山王遺跡―仙塩道路建設関係遺跡平成2年度発掘調査概報』
宮城県教育委員会　1993『宮城県文化財調査報告書第153集　山王遺跡―多賀前地区第1次調査 仙塩道路建設関係遺跡平成4年度発掘調査概報』
宮城県教育委員会　1994『宮城県文化財調査報告書第161集　山王遺跡Ⅰ―仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書』
宮城県教育委員会　1996『宮城県文化財調査報告書第170集　山王遺跡Ⅲ―仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書 多賀前地区遺物編』
宮城県教育委員会　1996『宮城県文化財調査報告書第171集　山王遺跡Ⅳ―多賀前地区考察編』
宮城県教育委員会　2001『宮城県文化財調査報告書第186集　山王遺跡八幡地区の調査2―県道『泉 - 塩釜線』関連調査報告書Ⅳ』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994『群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第176集　新保田中村前遺跡Ⅳ―一級河川染谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4分冊　第6・7次の調査』
千葉大学文学部考古学研究室　2002『千葉県勝浦市　こうもり穴洞穴　第1次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室　2003『千葉県勝浦市　こうもり穴洞穴　第2次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室　2000『千葉県勝浦市　本寿寺洞穴・長兵衛岩陰　第1次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室　2001『千葉県勝浦市　本寿寺洞穴・長兵衛岩陰　第1次発掘調査概報』
千葉県都市部・千葉県都市公社　1974『市原市菊間遺跡―市原市菊間地区における公営住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』
金剌伸吾　1969「印内町出土の太占について」『古代』第52号
船橋市遺跡調査会　1990『千葉県船橋市　印内台遺跡―第7・8次調査報告書』
船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター　1998『千葉県船橋市　印内台遺跡群(21)』
君津郡市文化財センター　1996『君津市文化財センター発掘調査報告書第117集　千葉県君津市 郡遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
総南文化財センター　2003『総南文化財センター調査報告第46集　千葉県安房郡白浜町 青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書―地域開発関連整備(秩序形成)白浜中央地区埋蔵文化財調査業務』
東京大学文学部考古学研究室　1979『向ヶ丘貝塚―東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告』
横須賀市教育委員会　1987『横須賀市文化財調査報告書第13集　蓼原―神明地区埋蔵文化財調査報告(1)』
鉞切遺跡調査団　1986『横須賀市文化財調査報告書第12集　鉞切遺跡―C・D地点の調査』
赤星直忠・岡本勇　1979「染谷砂丘遺跡」『神奈川県史』資料編20考古資料
横須賀市教育委員会　1994『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第3集　小荷谷遺跡―鴨居老人福祉センター建設に伴う事前調査』
横須賀市教育委員会　1992『横須賀市文化財調査報告書第26集　埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』
神奈川県立博物館　1972『神奈川県立博物館発掘調査報告書第6号　間口洞窟遺跡 資料編』
神奈川県立博物館　1973『神奈川県立博物館発掘調査報

告書第7号　間口洞窟遺跡 本文編』
神奈川県立博物館　1974『神奈川県立博物館発掘調査報告書第8号　間口洞窟遺跡（2）』
神奈川県立博物館　1975『神奈川県立博物館発掘調査報告書第8号　間口洞窟遺跡（3）』
三浦市教育委員会　1997『三浦市埋蔵文化財調査報告書第4集　大浦山洞穴』
横須賀考古学会　1984『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』
横須賀考古学会　1984『海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活—みうらの海蝕洞穴遺跡展』
浜諸磯遺跡調査団　1991『浜諸磯遺跡—古墳時代後半から奈良・平安時代にかけての砂丘上の集落遺跡』
浜諸磯遺跡調査団　1998『神奈川県三浦市　浜諸磯遺跡—E地点の発掘調査報告書』
かながわ考古財団　1999『かながわ考古学財団調査報告44　池子遺跡群Ⅷ №3・4・11地点—池子米軍家族住宅建設にともなう調査』
かながわ考古財団　1999『かながわ考古学財団調査報告45　池子遺跡群Ⅸ №1-A東地点・№1-A南地点—池子米軍家族住宅建設にともなう調査』
かながわ考古財団　1999『かながわ考古学財団調査報告46　池子遺跡群Ⅹ №1-A地点—池子米軍家族住宅建設にともなう調査』
由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団　1996『神奈川県鎌倉市　由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書—鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告』
由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団　1997『神奈川県鎌倉市　由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書—鎌倉市由比ヶ浜四丁目1136番地点（KKR鎌倉若宮荘）』
新潟縣教育委員会　1953『新潟縣文化財報告書第一（考古編）　千種』
長野県教育委員会　1980『長野市の埋蔵文化財第9集　四ツ谷遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（第3次）』
更埴市教育委員会　1969『生仁—更埴市生仁遺跡第一次（昭和43年度）緊急発掘調査報告』
更埴市遺跡調査会　1989『生仁遺跡Ⅲ—県営雨宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書』
長野県埋蔵文化財センター　1999『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26—更埴市内その5　更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—古代1編』
長野県埋蔵文化財センター　2000『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28—更埴市内その7　更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—総論編』
更埴市遺跡調査会　2000『長野県更埴市　屋代遺跡群—国道403号（土口バイパス）道路改良に伴う発掘調査報告書 本文編』
更埴市遺跡調査会　1999『長野県更埴市　屋代遺跡群—国道403号（土口バイパス）道路改良に伴う発掘調査報告書 図版編』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1990『長崎遺跡Ⅱ—昭和63年・平成元年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査概報』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第39集　長崎遺跡Ⅱ—昭和62・63・平成元年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第59集　長崎遺跡Ⅳ—昭和62～平成元年度・4年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
静岡市登呂博物館　1988『登呂遺跡基礎資料4　登呂遺跡出土資料目録 写真編』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1984『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第5集　大谷川Ⅰ—昭和58年度巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第20集　大谷川Ⅳ—巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）4』
浜松市教育委員会　2002『伊場遺跡発掘調査報告書第10冊　伊場遺跡遺物編8（木製品Ⅱ・金属器・骨角器）』
南知多町教育委員会　1989『南知多町文化財調査報告書第8集　愛知県知多郡南知多町　神明社貝塚』
田原本町教育委員会　1984『田原本町埋蔵文化財調査概要2　昭和58年度唐古・鍵遺跡—第16・18・19次発掘調査概報　黒田大塚古墳—第1次発掘調査概報』
田原本町教育委員会　1986『田原本町埋蔵文化財調査概要3　昭和59年度唐古・鍵遺跡—第20次発掘調査概報　黒田大塚古墳—第2次発掘調査概報』
田原本町教育委員会　1986『田原本町埋蔵文化財調査概要4　昭和60年度唐古・鍵遺跡—第22・24・25次発掘調査概報』
田原本町教育委員会　1988『田原本町埋蔵文化財調査概要6　唐古・鍵遺跡—第21・23次発掘調査概報』
田原本町教育委員会　1989『田原本町埋蔵文化財調査概要11　昭和62・63年度唐古・鍵遺跡—第32・33次発掘調査概報』
大阪文化財センター　1982『亀井遺跡—寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
大阪文化財センター　1983『亀井—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
鳥取県教育文化財団　2000『鳥取県教育文化財団調査報告書67　鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡1—一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
鳥取県教育文化財団　2000『鳥取県教育文化財団調査報告書68　鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡2—一般県道9号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ—』
鳥取県教育文化財団　2001『鳥取県教育文化財団調査報告書72　鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡3—一般県道9号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』

鳥取県教育文化財団　2002『鳥取県教育文化財団調査報告書 74　鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡 4 ―一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
鳥取県埋蔵文化財センター　2006『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 10　鳥取県鳥取市青谷町　青谷上寺地遺跡 8 ―第 2 次～第 7 次発掘調査報告書』
鳥取県埋蔵文化財センター　2008『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 21　鳥取県鳥取市青谷町　青谷上寺地遺跡 9 ―第 8 次発掘調査報告書』
古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会　2005『島根県八束郡鹿島町大字古浦　古浦遺跡』
岡山県教育委員会　1995『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 94　足守川河川改修工事に伴う発掘調査　足守川加茂 A 遺跡・足守川加茂 B 遺跡・足守川矢部南向遺跡』
岡山県教育委員会　2001『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157　下庄遺跡・上東遺跡―主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査 2』
愛媛県埋蔵文化財センター　1986『埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集　宮前川遺跡―中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書』
梅木謙一　2001「愛媛県出土の弥生時代動物関係資料」『久保和士君追悼考古論文集』
愛媛県埋蔵文化財センター　1998『埋蔵文化財発掘調査報告書第 67 集　斎院・古照―新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』
愛媛県埋蔵文化財センター　2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡―来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第 6 集』
長崎県勝本町教育委員会　1989『勝本町文化財調査報告書第 7 集　串山ミルメ浦遺跡―第 2 次調査』
木村幾多郎 1979「長崎県壱岐島出土の卜骨」『考古学雑誌』第 64 巻 4 号
坂田邦洋　1976「志多留貝塚」『対馬の考古学』　縄文文化研究会
山东大学历史系考古教研室　1990『泗水伊家城』　文物出版社
中国社会科学院考古研究所山东队・烟台市文物管理委员会　1986　山东牟平照格庄遗址」『考古學報」
東亜考古學會　1943『東方考古學叢刊　乙種第三冊　羊頭窪一　關東州旅順鳩灣内における志遺蹟』東亜考古學會